



木々と共生する住まい・暮らし

上甫木 昭春 *Written by Akiharu Kamihogi* ● 大阪府立大学大学院教授

木々のない砂漠で、人間は生活することができらるだろうか。無機質の石や砂とは異なる有機的な人間が、社会性を持って生きていくための条件を確保することは難しそうに思える。現代の都市は、人工的な建物が乱立し、孤立して生活する人が増えた様相から、都市砂漠ともいわれる。都市において木々と共生する意味は、まさに生身の人間が社会性を持って生きていくための健康な場づくりにあると思う。

インフラ（都市基盤）としての緑

まず、人々が暮らす都市そのものが健全であることが求められ、そのためには人工的な環境とバランスを持った緑のインフラが必要である。

森は生活基盤を生み出す

森の存在は、生活資材や水やエネルギーなど生活するための基盤を提供し、各地に小さな集落から巨大な文明を誕生させた。日本の伝統的な集落は、河口から川を遡った人々により水と肥沃な土地のある地につくられた。集落の周りには豊かな森が拡がり、水源の涵養、日常の燃料や田畑への肥料源として利用されていた。江戸時代の田畑と平地林が混在する地域では、その構成面積は同程度であり、持続的な関わり合いが形成されていた。このように、森の存在は生活環境の基盤として必須の要素であった。世界の四大文明が森の消失とともに滅ん

でいったのも、森と都市の中で循環的なシステムがなくなつたことによるともいえる。

精神基盤の付加

日本では、かつて山や岩や木といった自然物に精霊が宿るといった原始宗教が誕生し、森そのものが信仰の対象であつたという。本土の神社では、仏教の伝来などがきっかけとなり、鎮守の森の中に社がつくられ、鏡と武器で象徴される神が具現化されるようになった。

しかし、沖縄に行くときウタキ（御嶽）に森そのものを信仰する原型を見ることができると。たとえば、西表島の集落に入ると、ウタキ（写真1）として保全されている森や林が至る所にあるのに気づく。防風林、水源の涵養林としての機能も併存していると思われる森もある。



【写真1】西表島の祖納集落で森そのものが信仰されているウタキ（御嶽）

このように、精神的な基盤が付加され、生活基盤としての森の継承がより強固になっていると思われる。

地域自治の場に発展した鎮守の森

信仰の対象であった鎮守の森の歴史を辿ると、14世紀の南北朝の時代にそれまでの荘園制度を超えて村の自治制度が進み、鎮守の森のもとで村寄り合いが行われるようになったという。人々が鎮守の森のもとで村の掟を定め、神に芸能をささげ、またそれを楽しむ生活文化を興したことにより、鎮守の森は社会的意義を持つようになった。しかし、明治39年の「神社合祀令」により、鎮守の森は消滅の危機に陥った。これに反対運動を行ったのが自然保護の先駆者である南方熊楠であったが、その「神社合併反対意見」には、「合併は人民の融和を妨げ、自治機関の運用を阻害す」とあり、鎮守の森が村の自治の中核となっていたことを強く認識していたことが特筆される。

地域基盤を再生する森

その後、鎮守の森は、戦後の都市化やバブル経済に伴う住宅地開発や道路建設などで減少しているが、その一方で様々な期待を込めて新たに創り出された森もある。平安遷都1100年を記念した明治28年の平安神宮には、市民の寄付で創出された神苑がある。明治天皇の大嘗祭が東京で行われ、東京が都と認識されるに至り、都をなくした京都市民が教育

に力を入れ、時代祭を始めるなど新たな地域再生に向けた活動の一環として、森を創出したとされている。また、京都市内にある「糺の森」は、大正から現在まで市民が守ってきた森であり、発掘知見に基づき奈良時代の小川の復元など、その場が刻んできた地歴の発掘と再生が進められている。さらに近年大都市では、大規模な埋め立てによる敷地造成がなされたが、産業構造や都市戦略の変化に伴い、各地で森の創出も進められている。たとえば、兵庫県の「尼崎21世紀の森構想」では、遺伝子の攪乱を起こさないとといった生態学的配慮から、流域内の樹木から種子を採取し、市民参加による苗木の育成管理など、新たな地域資産として森の再生が進められ、その森を活用した新たな生活文化を創出しようとしている。このように、地域再生の象徴として、森が有する可能性は極めて高いと思われる。

生活のうるおいとしての緑

次に、人間そのものも本来自然の生態系に組み込まれた存在であるが故に、日常の生活空間の中でも、本質的に自然への欲求を満足させるための緑が必要である。

都市化とともに芽生えた自然を愛でる生活

近年、都市住民の自然志向が高まっているが、鉢植えや盆栽、花見、紅葉狩り、月見、雪



【写真2】平城宮跡に復元された自然の風景を主題とした東院庭園

見、自然を描写する和歌、日本の風景画の大和絵などの自然を愛でる生活は、平城京から平安京が成立した頃に芽生えたという。その背景には、自然を排斥して人工的に誕生した都での生活において、日常生活から遠のいた自然への欲求があったと思われる。自然を志向した庭園にもその思想を見ることができ、池と島、生命力のあるマツなどにより、神聖な世界が創出されている(写真2)。さらに、住まい空間の自然要素としての「切り花」や「花壇」の歴史を見ると、「切り花」は仏前の供花として伝来し、鎌倉時代には歌を詠む対象となり、江戸時代中期に公卿・僧侶の手から町人の手

へ移り始めた。また「花壇」については、鎌倉前期の「看聞御記」に花壇という語が初めて登場するが、江戸時代になると、ツバキ・ボタン専用の花壇、城郭・大名屋敷の花壇、染井・東鴨の植木屋の花壇など盛んにつくられている。このように、江戸時代になると園芸文化の隆盛が見られ、変化朝顔やキクの品種改良などが行われ、元禄時代(1690年代)にはキクの品評会もスタートした。これは、ロンドンの園芸協会の誕生(1804年)よりも約100年も早く観賞植物を愛でる生活が始まっていたことになり、現代のガーデニングブームなどもその延長上にあるのかも知れない。

庭に求められる役割

日本人は花や木を愛でる生活を江戸時代頃から始めたが、近年のニュータウン開発においても、住宅地の選択理由の一つとして「身近な自然の豊かさ」も多く指摘されている。その中で、建設年次が進むにつれ、庭の形態や庭木の種類にも変化が見られる。兵庫県三田ニュータウンでの調査によると、当初はカイヅカイブキなどによる生垣で囲まれた和風の庭が多い傾向にあるが、その後プリペットなどの洋風の生垣も増え、生垣そのものもない、通りから視認できる開放的な庭が多くなる傾向にある。家から楽しむ個人的な庭から、通りの人にも見せる庭に変化していることが窺える。このような状況の中で、これからの庭の役割として、安全性、景観性、生態性への配慮が必要

であると考えられる。まず、阪神・淡路大震災でも体験したように、ブロック塀の倒壊は避難・救援を妨げる要因となり、生垣化の推進により安心環境を確保することが必要である。さらに、生垣だけでは単調な景観になりやすいため、道際を花や緑で演出し、クリスマスデコレーションなどの年中行事に絡めた演出を行うことにより、通りの景観性に配慮した庭づくりも必要であろう。そして、地域の生き物に配慮し、庭へ鳥や昆虫を誘引する仕掛けを講じるなど地域の生態系への貢献といった視点も必要になってくると思われる。

人々をつなぐ媒体としての緑

最後に、社会性を持った人間は一人では生きていけないから、生活する地域で人々とながっていく緑が必要である。

地域をつなぐ緑との共生文化

個人の庭での緑の楽しみが、地域ぐるみの取り組みに変わる動きとして「オープンガーデン」が注目される。日本でのオープンガーデンは90年代後半から盛んに行われており、その目的は、庭の様相を觀賞しあうとともに、会員同士の交流、会員と地域住民や地域外からの訪問者との交流、地域の自然環境を守り育てることである。三田市における「三田花と緑のネットワーク」での活動状況を調査し

た結果、オープンガーデンの実施および関連活動に参加することで、庭空間の質や量およびコミュニティ形成が一定程度向上していることが分かった。さらに、個人の庭を出て、公園や道路、河川敷などで緑化活動に取り組む事例も増えてきた。堺市では、そのような活動を対象として「花と緑と人のふれあいコンクール」を実施しているが、このような地域ぐるみの緑化活動は、地域のコミュニティ再生につながる取り組みとして意義深いと思われる。

歴史的資源としての路傍樹の活用

また、地域の人々がつながることができる地域資源として、路傍樹をあげることができる。

路傍樹は、道路拡幅や区画整理などにより寺社や民家の敷地内から道路にはみ出して位置することになった樹木であり、注連縄や祠で祀られている聖なる樹木である。たとえば、大阪市内で調査した結果23本を確認したが、残存理由としては、「巳さん(白蛇)」伝説を持つものが半数以上の13カ所を占めていた。たとえば、太融寺から切り離された高さ14mのイチヨウ(次ページ写真3)は、龍王大神として祀られ、現在も道行く人が手を合わす姿を見かけることができる。昭和30年頃まで、地域の人が集まり盆踊りをした風景も見られたという。一方、保存会で管理されている長柄東の鶯塚のエノキ周辺では、毎年地藏盆が開催されている事例もある。このように良好に維持



【写真3】大阪市北区の幹線道路内に龍王大神として祀られているイチョウ



【写真4】神戸市西区の顕宗神社に復活した舞台上で演じられている農村歌舞伎

されている路傍樹に共通していることは、伝説と世話人の存在であり、長い時間経過の中で地域住民に大切に管理されてきたことが分かる。その結果として、路傍樹は地域の歴史的景観の創出と地域コミュニティの形成に貢献する重要な存在であるといえる。さらに場合によっては、地域コミュニティの核となる路傍樹が新たに誕生することも期待される。

地域住民の拠り所となる場の創出

江戸期までは、地域コミュニティの拠点であった鎮守の森は、明治期からその役割や物理的形態が徐々に変化し、戦後は生業や生活スタイルの変化などから、地域コミュニティの

核としての位置を失い、初詣、七五三、厄払いなど個人的なお参りの場として機能しているケースが多くなってきた。しかし中には、だんじり、農村歌舞伎など神社を核としたお祭りが継承・再興されているケースも見られる(写真4)。一方、近年の地域社会の課題として、核家族化や居住の流動化などが進み、地域とのつながりが少ない世帯が増えていること、その中で特に問題なこととして、地域とのつながりを持つ術が分からない人々が増えていることが指摘されている。そのような状況の中で、「地域としてつながる仕組み」をどのように構築するかが社会的な課題となっている。鎮守の森本来の機能や現状を再認識することにより、鎮守の森を「地域をつなぐツール」として活かしていくことが必要であると考える。

また、地域にはコミュニティの拠点として都市公園が計画的に整備されているが、政教分離の観点より宗教的な要素は除外されており、地域住民の精神的拠り所となっているか

という点と少し疑わしい。そこで、地域住民の拠り所となる場とは、都市公園と鎮守の森が保有している機能とが合体したようなものをイメージしている。屋外にあって、居間のような団らんのある場、客間のような人をもてなす場、仏間のような祈りの場など、地域の人々にとって物理的にも、精神的にも拠り所となる新たな場の創出が期待される。健康な地域環境を形成するためには、機能的・景観的・生態的な空間計画だけでは不十分で、精神的・文化的・宗教的な側面をどのように導入していくかが今後の大きな課題といえる。

以上のように、都市において木々と共生する暮らしの意味を、「インフラとしての緑」「生活のうるおいとしての緑」「人をつなぐ媒体としての緑」といった様々な観点から再考することが大切であると思われる。

CEL

上 雨 木 昭 春 (かみほぎ・あきはる)

大阪府立大学大学院生命環境科学研究科緑地環境科学専攻教授。1954年鹿児島県生まれ。79年大阪府立大学大学院農学研究科農業工学専攻修士課程修了。その後、(株)景観設計研究所設計長、兵庫県立人と自然の博物館主任研究員などを経て2001年より現職。主な著書は、『地域生態学からのまちづくり』(学芸出版社)など。